自閉症児のこだわり行動への支援に関する研究

—問題的な行動要素に関する先行条件の改善から—

Research on the support method for a child with autism and perseverative behavior

:Improving antecedents of problematic behavior components

平澤　紀子・馬場　　彩

教育学研究科教職実践開発専攻・岐阜県立揖斐特別支援学校

Noriko Hirasawa ; Graduate School for Teaching Profession

Aya Baba; Ibi special needs education school in Gifu prefecture

要　旨

本研究は，車への強いこだわり行動を示した10歳の自閉症男子１名を対象とした事例研究を基に，制止によらない支援の在り方について検討した。まず，対象児の車へのこだわり行動について，周囲の制止を引き起こす問題的な行動要素を同定した。次に，機能的アセスメントに基づいて，それらの行動要素の生起を防止し，適切な行動を生起させるように先行条件を改善した。その結果，他人の車にかけより，ドアを開けようとする行動は減少し，代わりの行動や他にできる活動が増え，制止から発展する他傷行動は生起しなくなった。本結果から，制止などの直接的な対応がもたらす二次的な問題を解決するには，こだわり行動の問題的な行動要素を同定した上で，その生起を防止し，適切な行動の生起を促す先行条件の改善が重要であることを指摘した。

Key Words　自閉症，こだわり行動，機能的アセスメント，先行条件，問題的な行動要素

Abstract

This study examined the support method without direct intervention for a child with autism who exhibited perseverative behaviors. A 10 Years old boy participated in this study at university special needs education center. First, his problematic behavior components were identified. Next, based on the functional assessment of these behaviors, improving antecedents were developed. Theses consisted of promoting less inappropriate behaviors, alternative behaviors and desirable activities. Result showed that his problematic behaviors decreased. Also, alternative behaviors and desirable activities increased. These results were discussed in the light of effective support methods not by means of intrusive procedures.

Key Words　Autism, perseverative behavior, functional assessment, antecedent, problematic behavior components

１　問題と目的

自閉症は，対人的相互反応における質的な障害，コミュニケーションの質的な障害，行動，興味，および活動の限定された反復的で常同的な様式の３領域からなる症候群である（DSM-Ⅳ-TR: American Psychiatric Association, 2000）。こうした障害のある子どもの中には，強いこだわり行動を示す場合がある。こだわり行動については，同一性保持に基づく行動と反復的な行動を区別する研究（石井・白石, 2003）もあるが，操作的な区別は難しいために，本研究では，行動，興味，および活動の限定された反復的で常同的な様式とする。

このようなこだわり行動が問題となるのは，その従事が自己完結的で，日常生活における様々な活動やかかわりが妨げられるところにある。それも，周囲がその行動を制止しようとすると，激しい自傷や他傷行動などに発展することもあり，生活上の困難さが増してしまう。こだわり行動は，発達的に変化しながらも消えることがない問題と捉えられる（鬼塚・大神, 1997）ことから，こだわり行動を制止するよりも，その行動を活かしながら，生活上の困難さを軽減する支援の在り方について検討する必要があろう。

こだわり行動を活かした支援としては，こだわり行動の従事を適切な行動を強める強化として使用する知見が示されている（Charlop, Kurtz and Casey, 1990; 服巻・野口・小林, 2000）。例えば，Charlopら（1990）は，常同行動やエコラリア，こだわり行動を示した自閉症児に対して，課題の従事に随伴して，こだわり行動の従事を促すことによって，課題の従事が促進することを示している。服巻ら（2000）は，福祉施設において自傷や他傷行動を示した自閉症青年に対して，作業の従事に随伴して，広告や洗剤を見るというこだわり行動の従事を促すことによって，適切な行動レパートリーを拡大させている。

これらの研究は，こだわり行動を適切な活動に組み込むことによって，その問題的な特徴を改善するものである。そのためには，こだわり行動が適切な活動に随伴して生起するように環境条件を変える必要がある。この点に関して，近年では，行動を生起させ，維持する要因（行動随伴性）を査定する機能的アセスメント（例えば，O'Neill, Horner, Albin, Sprague, Storey, & Newton, 1997）に基づいて，行動問題の生起を防止し，適切な行動の生起を促進する先行条件が注目されている（平澤, 2004）。そこで，こだわり行動の生起を防止し，適切な行動の生起を促す先行条件を改善することによって，その生起条件を変えることができると考えられる。それも，周囲の制止などを引き起こす問題的な行動要素に関する先行条件を改善するならば，制止などの直接的な対応がもたらす二次的な問題を防止できると考えられる。

そこで，本研究では，車へのこだわり行動を示した自閉症児に対する事例研究を基に，こだわり行動の問題的な行動要素を同定した上で，その先行条件を改善する支援を実施し，その評価結果から効果的な支援の在り方について検討することを目的とした。

２　方法

１）対象児

対象児は，特別支援学校に在籍する10歳の自閉症を有する男子１名であった。行動面の支援を主訴として，G大学教育学部附属特別支援教育センター（以下，センター）の教育相談に来訪していた。駐車場の車，物の操作，ひも揺らしなど，様々なこだわり行動を示し，保護者がそれらの行動を制止すると，激しく興奮し，腕にかみついたり，ひっかいたりする他傷行動を起こし，家庭や地域生活に制約が生じていた。

乳幼児発達スケール（ＫＩＤＳ）による検査結果は，総合発達年齢（１歳８ヶ月），総合発達指数（14.7）であった。各領域については，運動（５歳０ヶ月），操作（３歳０ヶ月），理解言語（１歳６ヶ月），表出言語（０歳７ヶ月），概念（１歳５ヶ月），対子ども社会性（１歳２ヶ月），対成人社会性

（1歳4ヶ月），しつけ（2歳8ヶ月）であった。

2）支援時期・支援場所・支援者

平成X年7月からX＋1年9月まで，週1回1時間から1時間半行われたセンターの教育相談において実施した。支援者は筆者であり，学生1～2名が補助者となった。

3）車へのこだわり行動に関する機能的アセスメント

対象児の車へのこだわり行動は，駐車場の他人の車に近づこうとするもので，車にかけより，ドアを開けようとする行動が含まれていた。

図1に，対象児の車へのこだわり行動において，問題が生じる状況と生じない状況の先行条件（A），行動（B），結果条件（C）について行動観察した結果を示した。

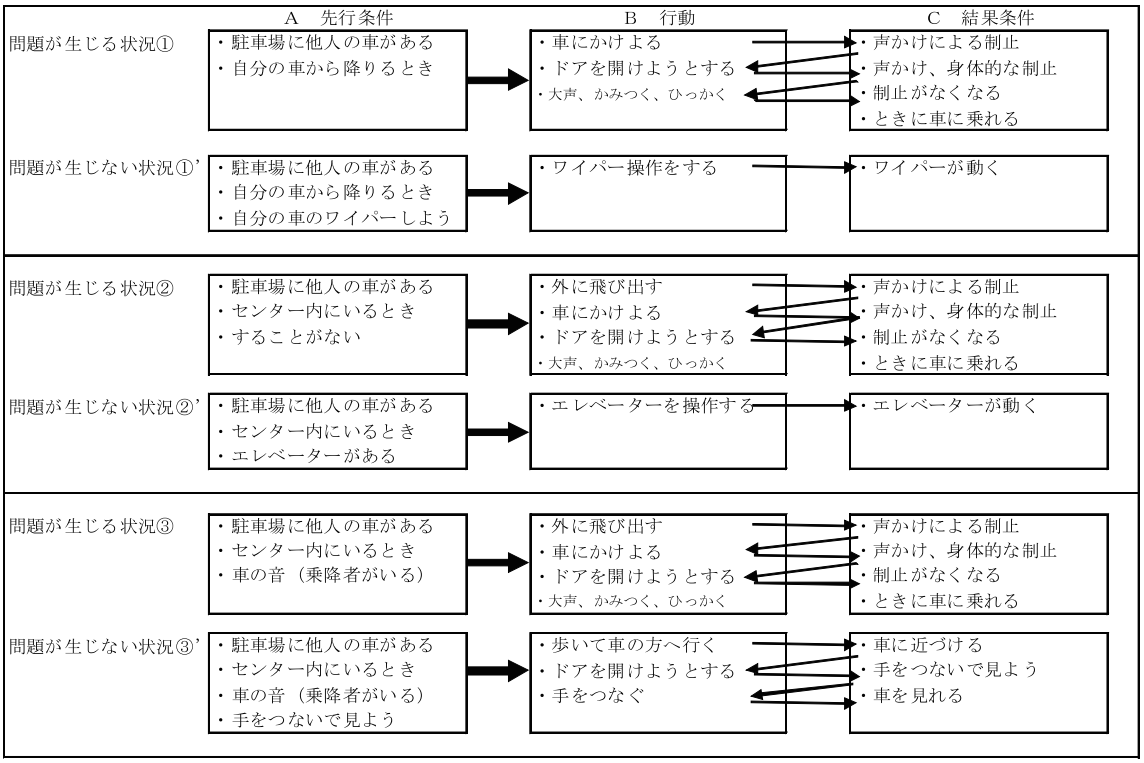

図1　対象児の車へのこだわり行動において問題が生じる状況と生じない状況

問題が生じる状況は，大学構内やセンターの駐車場に他人の車があり，①自分の車から降りるとき，②センター内にいてすることがないとき，③センター内にいて車の音がするとき（乗降者がいる）であった。いずれの状況においても，対象児は車にかけより，ドアを開けようとした。それに対して支援者や保護者が制止すると，対象児は大声を挙げ，腕にかみついたり，ひっかいたりした。その結果，制止がなくなり，ときに車に乗り内部を触ることができた。すなわち，対象児の車へのこだわり行動における問題的な行動要素は，①車にかけより，ドアを開けようとする行動と，②それらを制止しようとする対応によって発展する他傷行動であった。

①については，駐車場に他人の車があるとき（A），車に触り，ときに乗れる（C）ことで維持されていると考えられた。②については，制止される状況で（A），その制止がなくなることで維持されていると考えられた。

一方，いずれにおいても，問題が生じない状況があった。それは，自分の車のワイパーやセンターのエレベーターの操作をするときで（A），それらを操作し（B），動くのを楽しんだ。また，「手をつないで車を見よう」と声かけをすると（A），歩いて車の方に行き（B），支援者と手をつないで車を見る（C）ことができた。

４）機能的アセスメントに基づく支援方針

以上のアセスメント結果から，対象児の車へのこだわり行動において，車にかけより，ドアを開けようとする行動の生起を防止し，適切な行動を促す先行条件の改善を行うことによって，こだわり行動の問題的な行動要素が軽減できると考えられた（図２）。

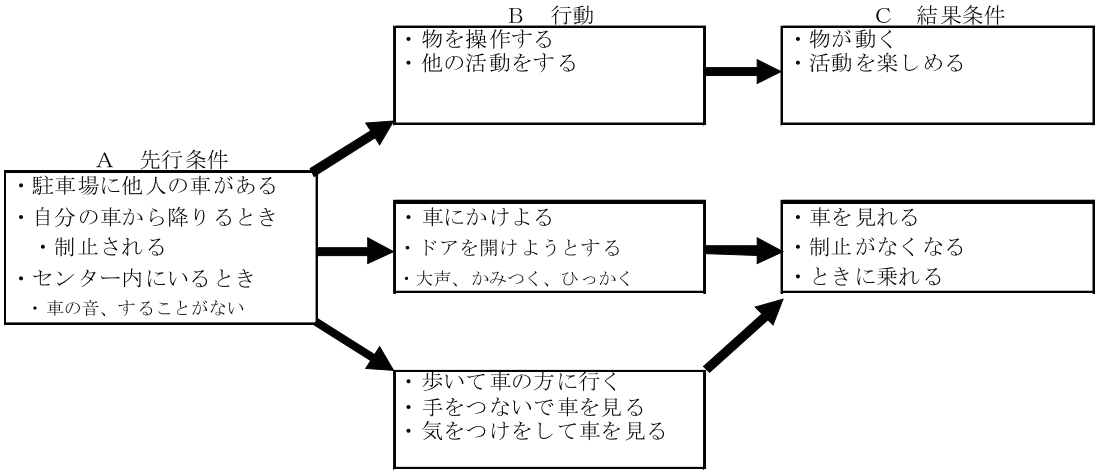

図２　対象児の車へのこだわり行動に関する機能的アセスメントに基づく支援方針

そこで，先行条件（A）の改善として，次のような支援を計画し，実施した。

①駐車場で自分の車から降りるときに，他人の車に近づかず，自分の車やセンターの方に行きやすくするように，保護者にセンター玄関前に車を駐車してもらう。

②車にかけよろうとしたときには，制止ではなく，自分の車のワイパーやセンターのエレベーター操作など，より不適切でないこだわり行動への従事を促す。

③することがない状況を改善するために，センターでできる活動を増やす。

④車を触らずに見る行動を促すように，「手をつないで見ようね」と声かけする。

５）評価・分析方法

42回の支援機会において，以下の測度について，チェックリストを用いた観察記録やビデオ記録を行った。

①車へのこだわり行動の生起レベル

対象児が駐車場の他人の車に近づいた機会（生起機会）における行動の生起レベルについて，次の５段階で評価した。

５：大学構内の駐車場の車にかけより，ドアを開けようとする

４：センター駐車場の車にかけより，ドアを開けようとする

３：駐車場の車に近づこうとするが，ワイパーやエレベーター操作に切り替える

２：センター駐車場の車を手をつないで見る

１：センター駐車場の車を気をつけをして見る

②他傷行動の生起に関する観察記録

③センターにおいて従事した活動数

支援の効果は，シングルケース・リサーチデザイン（Kennedy, 2005）を用いて，支援を行う前のベースライン（ＢＬ）期と支援を導入した支援期における対象児の行動を比較することで分析した。

3　結果

1）車へのこだわり行動の生起レベル

図3に，対象児の車へのこだわり行動の生起レベルを示した。

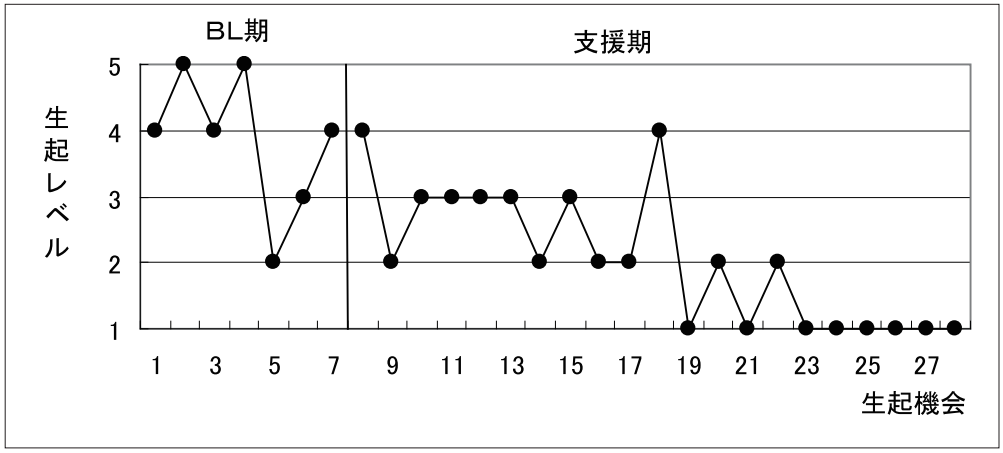

図3　対象児の車へのこだわり行動の生起レベル

42回の支援機会において，対象児が駐車場の他人の車に近づこうとした生起機会は，同一日に複数回のこともあり，全体で28回生じた。

ＢＬ期には，大学構内およびセンターの駐車場において，他人の車にかけより，ドアを開けようとし，それを制止する対応に対して，大声を挙げ，保護者や支援者の腕にかみついたり，ひっかいたりした。支援が導入されると，大学構内の駐車場には行かなくなった。センター駐車場においても，ワイパーやエレベーターの操作で切り替えられるようになり，他傷行動にまで発展しなくなった。支援後半になると，支援者と手をつないで車を見る行動が生起し，最終的には促しを得て自分から気をつけして車を見ることができるようになった。

2）センターにおける活動の従事

図4に，対象児がセンターにおいて従事した活動数を示した。

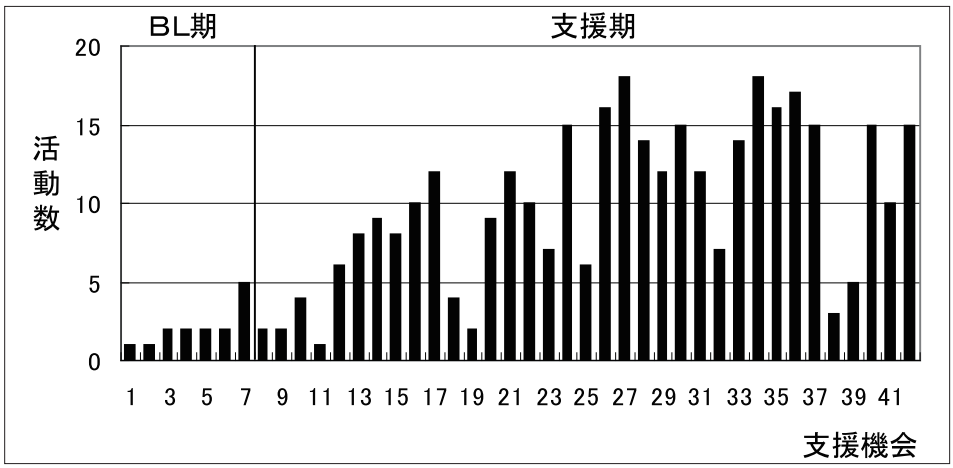

図4　対象児のセンターにおいて従事した活動数

ＢＬ期には，センターにおいて従事した活動数の平均は2.1であった。支援が導入されると，前半（支援機会８～20）には平均5.9，後半（支援機会21～42）には平均12.4と活動数が増加した。

４　考察

本研究では，車へのこだわり行動を示した自閉症児に対して，機能的アセスメントに基づいて，他人の車にかけより，ドアを開けようとする行動の先行条件を改善した。その結果，これらの行動は減少し，制止から発展する他傷行動は生起しなくなった。一方，ドアを開けようとする代わりに，手をつないだり，気をつけをしたりして車を見ることができるようになり，センターでできる活動も増加した。

この結果は，自閉症児のこだわり行動に対して，その生起条件を変えることで，こだわり行動の問題的な特徴を軽減しようとする環境的支援の有効性（Charlopら，1990; 服巻ら，2000）を支持している。加えて，その生起条件を変えるのに，こだわり行動の生起を防止し，適切な行動の生起を促す先行条件の改善が有効であることを示すものと考えられる。

とくに本研究では，対象児の車へのこだわり行動における問題的な行動要素が他人の車にかけより，ドアを開けようとする行動であり，それが支援者の制止を引き出し，それによって他傷行動へと発展することを分析した。そこで，他人の車にかけより，ドアを開けようとする行動が生起する状況としない状況から，これらの行動要素の生起を防止するように制止を控え，自分の車やセンターの方に行きやすいように自分の車の駐車位置を変えた。また自分の車のワイパーやセンターのエレベーター操作など，より不適切でないこだわり行動の従事を促した。それによって，対象児の関心が他人の車でなく，自分の車に変わり，支援者が制止をしなくても済む状況が生まれた。それが，制止によらない支援の第一歩になったものといえよう。

さらに，支援後半になって，対象児は手をつないだり，気をつけしたりして車を見ることができるようになった。このことは，代わりにできる行動や活動（物の操作やセンターでできる活動）が拡大したことが関係していると考えられる。すなわち，ドアを開けようとする行動はドアが開き，ときに乗り内部を触るという結果で維持されている。それは，車に触らずに見る行動とは機能的に等価ではなく，本来，それらの行動が置き換わるものではない（平澤，2004）。それにもかかわらず，車に触らずに見る行動が生起するようになったことには，適切な行動が生み出す結果が増えることで，車へのこだわり行動を強化していた結果の効力が相対的に低下したことが考えられる（平澤，2004）。自閉症児の場合，こだわり行動の従事そのものが強化となっていることが多い（Reese, Richman, Zarcone, & Zarcone , 2003）。したがって，他の強化を生み出す適切な行動を拡大することが，代わりの行動の獲得を容易にすることを示すものであろう。

一方，対象児が他人の車に近づく行動そのものは消失せず，支援期全体にわたり生起した。このことには，センターでの活動プログラムも影響していると考えられる。すなわち，センターでの活動は，自由遊びを中心とした活動が多かった。もし，構造化された活動であれば，全ての活動をしてから，車を見るというような支援も可能になり，車に近づく行動そのものを軽減できた可能性がある。他人の車を見るという行動は，それが容認される環境であれば問題ではないが，地域において問題を生じないとも限らない。本研究を初期ステップとして，今後，地域における支援につなげるための検討が必要である。

以上，自閉症児のこだわり行動は，それを制止する直接的な対応が二次的な問題をもたらしやすい。それを解決するには，こだわり行動の問題的な行動要素を同定し，その生起を防止し，適切な行動の生起を促す先行条件の改善が重要である。

付記

本研究の一部は，共同研究者の馬場（月田）彩の卒業論文に公表した。

謝辞

研究を公表するにあたり対象児の保護者の承諾を得ました。ご協力に感謝いたします。

文献

1) American Psychiatric Association (2000) Diagnostic and statistical manual of mental disorders, 4th rev. (DSM-Ⅳ-TR). American Psychiatric Association, Washington, DC.
2) Charlop, M. H., Kurtz, P. F., and Casey, F. G. (1990) Using aberrant behaviors as reinforcers for autistic children. Journal of Applied Behavior Analysis, 23, 163-181.
3) 服巻繁・野口幸弘・小林重雄（2000）こだわり行動を利用した－自閉症青年の行動障害の改善－機能アセスメントに基づく代替行動の形成－．特殊教育学研究，37，35-43.
4) 平澤紀子（2004）発達障害児の行動問題解決支援における望ましい行動の促進に向けた先行条件に関する概念的検討．岐阜大学教育学部研究報告人文科学，53，249-257.
5) 石井哲夫・白石雅一（1993）自閉症とこだわり行動．東京書籍.
6) Kennedy, C. H. (2005) Single-case designs for educational research, 150-162. Allyn and Bacon, New York.
7) O'Neill, R. E., Horner, R. H., Albin, R. W., Sprague, J. R., Storey, K., & Newton, J. S. (1997) Functional assessment and program development for problem behavior: A practical Handbook. Brooks/Cole Publishing Co. Pacific Grove, CA.
8) 鬼塚良太郎・大神英裕（1997）自閉症児・者におけるこだわり行動の変遷について．九州大学教育学部紀要，42，105-119.
9) Reese, R. M., Richman, D. M., Zarcone, J., & Zarcone, T. (2003) Individualizing functional assessments for children with autism: The contribution of perseverative behavior and sensory disturbances to disruptive Behavior. Focus on Autism and Other Developmental Disabilities, 18, 89-94.